

2006年1月5日発行

# ぱるす

四季の会・ユーザーズ・サービス

202号

発行人 浅沼 邦夫

新年あけましておめでとうございます。

年頭にあたり、私たちにとって大事なことは「気づき」と「実践」です。「全てを守れば、全てを失う」といわれる。「保身」ではなく「変身」しよう。自分を高めよう。ビジョンを持とう。そして愛と感謝とありがとう。稲盛和夫氏の書の中で、**人格というものは「性格+哲学」である。**人間が生まれながら持っている性格と、その後の人生を歩む過程で学び身につけていく哲学の両方から、人格というものが成り立っている。哲学という根っこを、しっかりと張らなければ、人格という木の幹を太く、まっすぐに成長させることはできない。

「哲学」の中で「**立志**」がある。立志のことを幕末の志士・橋本左内は、15歳の時に「啓発録」を書いた。「1、**雑心を去れ**（子どもっぽい甘ったれた心を去れ）1、**気を振るえ**（元気を出せ）1、**志を立てよ** 1、**学を勉めよ** 1、**交友を択べ**」**見事な決意である。**志は若者の専売特許ではない。30代には30代の、50代には50代の、60代には60代の立志がある。（致知1月号より）

人には「思い」そして「仕事ぶり」がある。その「思い」は「志」を持っているか！志の高低がその人の人生を決定するのである。「命」という字、「人」はこの世で「一回」きり、だから己を「叩け」。「命をかける」。企業には「命運をかける」。商品や技術等「物は生きている」。物は人と同じように生きている。「生きている命」を、叩いていかないと、死んでしまうのです。

「朝」という字、十月十日と書いてある。私がここに生きている。親があるからこそ自分の命がある。感謝なくして何があるのか！！

恩の遡源。恩とは自己存在の原因に遡る意識である。自覚に達した状態である。企業には恩の遡源がある。「トップの思い」が企業となり、その企業の継続は人の継続である。継続の人の輪が今日を可能にしたの

である。徳川家300年の継続は、徳川家康を神と祀り、組織をつくり、**継続は人の継続であった。**

人の「思い」は「波動」する。年代を超えて「波動」はエネルギーを持つ、共鳴する空間を創る。波動はさらに時空を超えて連綿として受け継がれる。企業の伝統となり、健全な波動がある限り、その企業は成長発展のエネルギーを持つのである。

年頭にかっこよくこんなことを書かせていただきました。今年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

## 「功名が辻」大河ドラマ 中小企業の成功物語です

1月8日(日)NHK大河ドラマ「功名が辻」がスタートする。現代の中小企業の創業から成功への物語です。所長先生・所員の方々に、企業を感じとるのに参考になるかと思う。是非、御覧いただければと思っています。夫婦が力を合わせ、ないないづくしのゼロからのスタート。私たちも創業はそうだった。**夫婦がいたわり合って生き抜く素晴らしさと、歴史を学ぶことで、感じてほしいと願っています。**

「山内一豊」は、信長、秀吉、家康の3英傑に仕えて、関が原以降も生き延びた。あの時代には珍しい武将です。「一豊」は裏がなく嘘もつけない凡庸な男だった。そこで、その実直さこそ「千代」はかけがえなく思い、愛したんだと思います。夫の足りないところは自分が補っていこうという気持ちを持った。しかもそれを、小賢しくなく、夫を褒めながら、その利口さが夫を生かし、ふたりを生き延びさせたと思います。**そんな夫婦像には、現代にも通ずるものがあるのです。**

「ここぞ」という大勝負に打って出る。そのタイミングを見計らう「千代」の判断と決断力は素晴らしい。織田信長は京都で「馬揃え」、現代風の騎馬隊の閲兵式を行った。配下の武将たちに晴れ姿で参加するように命じた。この式典に際して、一豊の馬は老馬だった。

千代は「母から貰った黄金10両、夫がどうしても必要な時に使いなさい」と言われていた。この時とばかり、名馬を買いたいという夫のために使った逸話が今日も伝えている。この式典の時、信長は、一豊の馬に目を止め、側近に「あの馬に乗っているのは、だれだ。本当に見事な馬に乗っている」と聞いた。一豊と聞いて、信長は大いに感心した様子で、すぐに、1000石を一豊に与えることにした。「いざ」というときのため、密かに蓄えていたカネが、生きたカネとなり、夫の大出世への道を開いたのである。

有名なエピソード「笠の緒の密書」がある。慶長5年、会津へ出陣した家康の留守を衝いて挙兵した三成は、敵陣営を切り崩そうと強硬な手段を選ぶ。大坂屋敷を包囲し、留守を守っていた東軍諸将の妻子を人

質にとった。家康は「三成の味方したい者があれば遠慮なく戻って構わない」と公言したと伝えられる。

さて、屋敷を包囲された千代は、一豊に向け密かに夫のもとに、ひとつの文箱を、使者の「笠の緒」により隠した密書であった。一豊はまず密書の方を読むとそれを焼却し、文箱の方は開封せずに家康に差し出した。そこには三成方からの勧誘状と共に、一豊に宛てた千代からの手紙が入っていた。

「夫の名を汚さぬ覚悟は出来ているから、心おきなく家康様に尽くして欲しい」と、あつたと伝えられる。これを目にした家康は、千代の死を厭わぬ献身ぶりと、家康に対し隠しごとをしない一豊の律儀さに、心を動かされるのである。千代からの密書は、恐らく文箱を開けずに、家康に差し出すように指示してあったろう！危機的状況にあっても、常に夫の事を案じる千代ならではの機転があった！！

「笠の緒の密書」の逸話は「山内家の家伝」に残されている。千代があつての「土佐24万石」の大守へと変わった。千代は天性の明るさと卓抜した政治感覚で、真心一筋の不思議な夫を支え続けたのである。

## 決算書の見直しをしよう

決算書を軽くみる。重視する。先生のそれぞれの考え方です。お客様である社長が、決算書に非常に興味を持っているのです。しかし、決算書を説明していない会計事務所が非常に多いのです。ビジネスチャンスを失っていくのです。**決算業務には2つある。1つは、決算書を税務署・銀行へ提出する。2つは、社長として決算書をよく見る。経営内容をよく知る。つまり社長に決算書をよく理解、納得させることです。**

今や「**幸運作用**」の時代。プラス発想すると幸運に出会う。プログラム、スタイル、マナーを求めている時代のような。夢づくりを提案しましょう！夢づくりをお手伝いしましょう！夢の世界にご案内しましょう！お客様を幸運の世界にいざないましょう！お客様へのお手伝いは「**決算診断**」！これを徹底して活かしていきましょう！

大多数の経営者は、**決算書を見たけど内容がわかりません。決算書は会社の「強烈な利害関係者」である「銀行と税務署」に渡るので。彼らはよく見えています。決算書の解説書として「**決算診断**」が深い意味を持つのです。彼らが見る前に、先回りして、よく社長にわかってもらうのです。「**決算診断**」には深い意味があるのです。**

「**決算診断**」は「**幸運作用**」を持っているのです。経営者にとって、喜ばれ、経営課題に気づいていただくのです。会計事務所では決算書の解説として、所員のレベルアップに最高の研修になるのです。幸運への演出が重要です。感じてもらうことが大切です。他の会計事務所との差別化であり、ドラマティックに提供できるものと思っています。